

# 疑問詞「どんな」を含む質問に対する答え方の問題点

清水 昭子・板井 芳江

## アブストラクト

筆者らは、初級学生の会話の問題点の一つ、「説明するための表現が身につけていない」ことに関して、「どんなN」質問文の学生の答え方を手がかりに、初級での指導の研究を進めている。本稿では、「どんなN」質問文を5つのタイプに整理し、そのタイプの中で答え方の傾向と特徴を見た。さらに、その中でもタイプ1「教科書などで学習した質問」とタイプ4「どんなことを含む質問」に対する答え方の問題点を指摘して考察し、解決方法を探った。

その結果、タイプ1の「どんなN」質問は、「どんな」が初級の早い時期に学習する項目であるため、その時期に学習した語彙の範囲内で練習した答え方に縛られ、そこからの広がりが少ないこと、また「どんなこと」の質問では、答えはできても表現に稚拙さがあることと、話の流れがつかめていないとき、適した答えができないことが分かった。これらのことを踏まえ、今後授業では、バリエーションのある答え方の練習、文脈のある会話練習をしていく必要があることを指摘した。

**キーワード：**どんな、会話教育、文脈、説明力、ゼロスタート学生

## 1. はじめに

### 1.1 背景

先に、筆者らは立命館アジア太平洋大学 (APU) の日本語初級コースの学生を対象に、会話テストの後のフィードバック内容を探るために、会話練習のデータの中から問題点を検討した。具体的には、教師と学生のやり取りがスムーズに行われていない場面で起こる、教師が同じ内容を2度以上繰り返している質問（2度質問）に注目し、2度質問を引き出している学生の問題点を分類し、その原因を考察した<sup>1)</sup>。その結果、① 会話の流れについていくという文脈理解力、② 相手にわかるように順序立てて話す説明表現力、③ 質問に対しすぐに意思表示や対処ができる即答力の3点を強化していく必要があることが分かった。

とりわけ②の説明表現力に関して、「どんな+名詞(以下どんなN)」の質問に対して的確な答えができていない学習者が目立ったことから、「どんなN」質問について考える必要があると指摘した。「どんなN」は、Nの属性<sup>2)</sup>を問うものであり、Nについての性質や状態などの説明を求められる質問である。そのため、質問に答えるには適切な語彙や表現を選んで使う力が必要となってくるので、難易度が高いと思われる。また、「どんな」は初級の早い時期に学習する項目であるため、その時期に学習した語彙の範囲内で練習した答え方に縛られている可能性もあると考えられるが、先の研究結果だけでは明らかにすることができなかった。さらに、実際の会話においても、「どんなN」を含む質問は、話題を広げる上で有効な表現であり、使用範囲は広く、使用頻度も高い。以上のことがらから、「どんな」質問に関する具体的な問題点を明らかにすることには意義があると考えた。

そこで本稿では、「どんなN」質問の問題点を解明するため、教師による「どんなN」の質問文をタイプに分け、それぞれのタイプの質問に対する学生の答え方に注目して学生の答え方から問題点を分析し、これにより表現力を伸ばすための方法を探りたい。

### 1.2 「どんな」の定義

疑問詞「どんな」に関する研究は、筆者らの知る限り見当たらない。疑問詞そのものの文法的な説明は文法解説書には項目としてあるが、「疑問詞」の種類が示されているだけで、個々の疑問詞に関する細かい記述はない。また、辞典類には、「どんな」について、「連体詞。そのものを、性質・状態・内容などの点からどの種類(範囲)と限定することができない、ということを表す」(『新明解国語辞典』第5版)となっており、教育を視野に入れた参考書では、「どんな」は属性を表す疑問詞と記述されている。(『初級を教える人のための日本語ハンドブック』p.8) そこで本稿では、「どんな」

は『『どんな』のあとに来る名詞の属性を尋ねるために使われる疑問詞』と考えることとする。

## 2. 方法

### 2.1 手順

本研究は以下のような手順で行った。

- ① 会話の音声録音を聞きなおし、教師による「どんな」を含む質問とそれに対する学生の答えの個所を抽出・文字化する。
- ② 教師の質問をNによってタイプに分ける。
- ③ ②のタイプ別に学生側の問題点を洗い出し、分析する。
- ④ ③を基に問題点の解決策を模索する。

### 2.2 分析資料

分析資料は、2010年春、2010年秋に行った会話を録音した音声資料である。本研究の資料である会話の対象となった学生は本学初級コースの学習者59名で、国籍は、中国19名、韓国12名、ベトナム8名、インドネシア6名、タイ3名、台湾3名、アメリカ2名、ウズベキスタン、サウジアラビア、インド、バングラデシュ、ガーナ、スウェーデン各1名である。また、学習者59名のうち、日本語を学習するのは本校で初めてのゼロスタートの学生が22名<sup>3)</sup>、自分の国ですでに日本語の学習経験のある既習学生が37名であった。また、会話の教師側の担当は筆者(清水と板井)が行った。

データは会話の様子をICレコーダーで録音したものを扱っている。そのため、音声に現れた表現をその範囲としており、会話の際の言語外表現は資料として扱っていない。

資料の中の会話は教師と学生による1対1問答形式である。トピックは「旅行」「家族」「大学生活」「アルバイト」「ひっこし」「こまったこと」「うれしいこと」などである。教師による質問は、質問リストによるものではなく、学生の回答内容から質問を広げていく形式で行われた。

## 3. 結果

### 3.1 教師の質問のタイプ

会話の音声録音を聞きなおし、教師による「どんな」を含む質問とそれに対する学生の答えについて検討した。まず教師による質問のタイプを次の5つに分類してみた。

質問のタイプ：

- T1 教科書の練習や練習プリントで取り上げられた質問文
- T2 教科書などの練習にはないがNが具体的で、Nの答えが名詞・形容詞だけで表せるもの
- T3 Nが抽象的で、答えるために文で話す必要があるもの
- T4 Nが形式名詞
- T5 Nが代用の名詞「の」<sup>4)</sup>

この5つのタイプの分類基準と質問の例は下記のとおりである。さらに、本分析資料にある教師による「どんなN」質問に出たすべてのNを一覧にすると表1のようになる。

タイプ1 (T1) は初級の教科書の練習や練習プリントで取り上げられた質問文である。本学では初級の教科書として『日本語5つのとびら 初級編1,2』を使っており、「どんなN」の学習項目はトピック6で扱われているが、この課で使う教材や宿題プリントの練習の中にある「どんなN」を使った質問文をタイプ1とする。ここでは、「どんなN」を初めて学習するトピック6の練習問題から出題され、「どんなN」の導入時や練習で一度は答えたことのある質問文のみをこのタイプとする。よって、他の課で練習する「どんなアルバイト」「どんな部屋」などはこのタイプには含まれない。このタイプの練習問題には例えば以下のようなものがある。

- 例 1) どんなパソコン（電子辞書）を買いましたか。
- 例 2) あなたの国はどんな国ですか。
- 例 3) どんな料理（映画、スポーツ）が好きですか。
- 例 4) ○○さんはどんな人ですか。など

タイプ 2 (T2) は教科書などの練習はないが N が具体的なものとする。タイプ 1 のように授業や練習プリントで練習したものと全く同じではないが、N が具体的かつ身近なもので、答えのイメージがわかりやすいものをこのタイプの中に入れる。また、この N に対する答えは、名詞や形容詞の一言でも答えることが可能なものがここに入る。例えば以下のようなものである。<sup>5)</sup>

- 例 5) どんな服を買いましたか。
- 例 6) どんな自動販売機がありましたか。

タイプ 3 (T3) は N が抽象的な言葉とする。タイプ 2 と違い、N に対する答えは文で答える必要があり、より説明力を問われると思われる。ただ、初級の段階では抽象度の高い語彙の提出が少ないため、このタイプの例は少なかった。例えば以下のようなものがあがっている。

- 例 7) 寮にたくさんルールがありますね。どんなルールがありますか。
- 例 8) それはどんな活動ですか。話してください。

タイプ 4 (T4) は N が形式名詞の場合とする。形式名詞は単独では使えず、実質的な意味がないものを指し、ここでは「どんなところ」「どんな時」「どんなこと」の 3 点とし、例えば以下の例のようなものである。

どんなところ …物事のあるポイントを問う

- 例 9) どんなところがおもしろいですか。
- 例 10) (兄弟と) どんなところがちがいますか。  
ただし、具体的な「場所」を問う「どんな所」は T2 に含める。
- 例 11) どんなところにすみたいですか。

どんな時 …物事が起こるときを問う

- 例 12) どんな時に一番日本語で困りましたか。など

どんなこと…物事の内容を問う

- 例 13) どんなことを話しましたか。  
どんなことを将来したいんですか。  
夜友だちとどんなことをするんですか。

タイプ 5 (T5) は N が代用の名詞「の」の場合に使われる「どんなの」とした。代用の名詞「の」は、「どんな N」と同様にトピック 6 で学習する。しかし、「どんなバイクがほしいですか。」「やすいのがほしいです。」のような導入と練習はするが、「どんなの」という疑問詞を伴った形での練習は授業内では十分になされていない。会話の中には次の例があった。

- 例 14) 北京の有名な建物ですか。例えばどんなの。

表1 会話の中に出てくる「どんなN」質問のNとそのタイプ

タイプ	N
T1	国、町、大学、人、友だち、料理、音楽、映画、生活、
T2	服、靴、コート、歌、ドラマ、マンガ、ゲーム、写真、おみやげ、プリン、自販機、車、デパート、 お店、 アルバイト、勉強、授業、宿題、所(place)、場所、家、部屋、家族、弟さん、彼女、子ども、 日本人、顔、もの、言葉(言語)
T3	話、活動、仕事、ビジネス、会社、日本語、言葉、ルール
T4	ところ(point)、とき、こと、いいこと、おもしろいこと、
T5	の

### 3.2 回答状況

会話資料データの中からのタイプ別の質問のべ数とそれに対する学生の答えの状況を整理してみた。

資料の中で「どんな」を含む質問は全部で166あった。タイプ別の質問のべ数及び質問に対して整合性のなかった学生の答えの数とその割合を一覧にすると下の表ようになる。

表2 「どんな」質問のタイプ別質問のべ数と不整合

	質問のべ数	不整合数	未習	既習	不整合率(%)
タイプ1	55	4	4	0	7.2
タイプ2	67	11	8	3	16.4
タイプ3	13	2	0	2	15.4
タイプ4	29	5	2	3	17.2
どんなこと	20	4	2	2	25
どんないいこと	1	1		1	
どんなおもしろいこと	1	0			
どんなところ	5	0			
どんな時	2	0			
タイプ5	2	0			0

タイプ別の質問のべ数では、タイプ2が一番多い。これは表1からわかるように、タイプ2はNの種類が多いからだと思われる。それに対してタイプ1の質問はNが9例しかなく数自体は少ないが、同じ質問を多数の学生にしていることよりのべ数が多くなった。Nの抽象性が高いタイプ3と4では、タイプ4のほうが質問のべ数が多い。これは、タイプ3に入るべき抽象名詞をまだ初級のこの段階では学習していないことが理由だと思われる。タイプ4は5種類あがっているが、その中では「どんなこと」の数が一番多い。これは、さらに説明を求める時に「どんなこと」が使いやすいからだと考えられる。タイプ5は、今回のデータでは2例しかない。このタイプは授業であまり扱わなかったため教師による質問の数も少なくなったと思われる。

次に、質問に対する答えの不整合率をだして、数字の比較をしてみた。不整合率が最も小さいタイプ1が、質問としていちばんやさしいタイプではないかと推測できる。しかし、本研究のデータはタイプ2, 3のNが多様である上に、学生に同じ質問をしたわけではなく、答えている学生のレベルもゼロスタート学生と既習学生が混在しているため、こ

の数字の信頼性は疑わしい。今後、Nを統一した同じ質問を全員の学生にし、それを資料データにしてさらに分析を行う必要がある。

#### 4. 問題

前節で数の比較をしたが、本節では内容からうかがえる問題点を見ていく。ここでは次の2点の問題を取り上げたい。一つはタイプ1の問題である。このタイプの「どんなN」のNは、初級の初めに学習するやさしい既習語彙であり、質問自体は簡単であると考えられ不整合率も低いが、答え方に問題が見られたので、これに注目してみたい。もう一つはタイプ4の中の「どんなこと」に関する学生の答え方に見られた問題点を取り上げたい。このタイプ4のNは形式名詞で初級の段階では学習しない。また、実質的な意味をもつ「こと」も学習していない。しかし、Nがこの形式名詞である場合、学生の答えはどうか、中級以降での学習に必要なことを知るヒントが得られるのではないかと考えるからである。

なお、タイプ2に関してはNの種類が多く比較が困難だと思われる。また、タイプ3と5に関しては例が少ないためここでは取り上げないことにする。

#### 4.1 タイプ1の問題点

このタイプの質問文は教科書や練習プリントですでに練習したものと同じである。その影響によるものなのか、学生の答えには、学習した当時の語彙と表現しか使われておらず、特にゼロスタートの学生にこの例が顕著にあらわれていた。

本学では初級の教科書として『日本語5つのとびら 初級編1,2』を使っている。この教科書はトピックシラバスで編成されており、トピック1からトピック20までであるが、トピック17までを初級クラスで学習することになっている。

「どんなN」の学習項目は、トピック6で扱われており、同じ課で、「形容詞+名詞」(例;新しいかばん、きれいな色)、「形容詞+形容詞 くて/で+名詞」(例;うすくて小さいノート、ハンサムで親切な店員)などを学習する。そのために、授業ではこれらの学習項目とともに「どんなN」を導入・練習している。また、この教科書ではトピック5で初めて形容詞を導入し、トピック6でも形容詞関連の文法項目が続くため、学習語彙も形容詞が集中して入ってくる。「どんなN」の練習も当然これに付随して形容詞を使つての答える練習しかこの段階ではしていない。

このように、「どんな」はトピック6という初級前半の早い段階で学習する項目であるが、この会話をを行った時期ではトピック16~17まで終了していた。それにもかかわらず、学生のほとんどがトピック6までの語彙のみで答えており、「どんな町ですか。」「どんな人ですか。」「どんな映画ですか。」など、導入練習や復習の際練習したとおりの答え方しかしておらず、以下のような画一的でバラエティーもオリジナリティーもない答え方であった。

表3は、本学で初めて日本語を学習するゼロスタートの学生による「どんな町(国)ですか。」と「どんな人(友だち)ですか。」に対する答えである。例えば「どんな町(国)ですか。」の質問は22人の学生にしており、これに対する答えのほとんどがトピック5,6で練習したパターン1,2,3の答え方であった。また、「どんな人(友だち)ですか。」の質問に対する答えも同様で、8例のうち6例がこのパターン1,2,3の答え方で答えていた。残りの2例も教科書のトピック1で習う「名詞+です」の構文で答えるパターン8の答え方であった。

表3 質問「どんな町(国)ですか。」「どんな人(友だち)ですか。」のゼロスタート学生の答え方のパターンと例

パターン	構文	N	例	回答人数	学習した課
1	形容詞+N	町	きれいな町です。	8	6
		友だち	きれいな友だちです。	3	
2	形容詞 けど/が +形容詞+N	町	にぎやかですけど、おもしろい町です。	2	5,6
3	形容詞 くて/で +形容詞+N	町	にぎやかで楽しい町です。	8	6
		人	楽しくて静かな人です。	3	

4	2文;名詞、形容詞 くて/で +形容詞+N	町	インドのキャピタルです。きれいでにぎやかな町です。	1	1, 6
5	2文;形容詞+N 接続詞 形容詞 (N)	町	大きい町です。でもちょっとうるさいです。	1	5, 6
6	2文;形容詞+N、があります	町	にぎやかな町です。人がたくさんあります。	1	3, 5
7	2文;形容詞 くて/で +形容詞、好きです	町	小さくて、とてもきれいです。私は大好きです。	1	6, 7
8	名詞	友だち	高校の友だちです。	2	1

さらに、使用語彙に関しても、「どんな町」に対するゼロスタートの学生の答えには「にぎやか、楽しい、静か、きれい、いい、うるさい、おもしろい、人が多い、小さい、大きい、便利、つまらない」など、いずれもトピック6までに習っている語彙しか使われてなかった。同様に、「どんな友だち」に対する答えも、「たのしい、静か、やさしい、きれい、親切、いい」などで、これにもトピック6までで勉強した当時の語彙しかほとんど使われていなかった。

一方、日本語学習歴のある学生による「どんな町ですか。」に対する答え方には次のようなものがあった。

例15) 上海、人口たくさんです。う、でも、上海のバスとか地下鉄とても便利です。上海の地下鉄とバス、別府より、別府より高くない

例16) アジサイ、紫の花が、すごい有名で、毎年、アジサイの祭りがあります。

この2例はいずれも、語彙にバラエティがある。構文についてはそれほど難しいものを使っているわけではないが、例15、例16に共通して言えることは、「どんな町」の町の特徴となるものをとらえて、それを習った構文を使って、説明していることである。「どんな」は「『どんな』のあとに来る名詞の属性を尋ねるために使われる疑問詞」と定義したが、その名詞の属性について説明するためにはその「どんなN」質問のNの特徴をとらえる必要があり、この学生たちはそれがうまくできていると言える。

問題点1に関してまとめると、ゼロスタートの学生によるタイプ1の質問の答えは、教科書で学んだままの語彙と構文による広がりがない答えで終わっており、習ったままの状態、固定化されている。学生はそれで満足しているようである。「どんなN」の質問に対する答えには、初めて習ったときに学習した表現以外にもさまざまな答え方があり、それ以降習う語彙や表現を使えばより豊かに上手に説明できることに気付かせる必要がある。

したがって、授業内でもそれを念頭に置いた練習方法を考えていく必要がある。例えば、本学の教科書はトピックシラバスになっているが、「どんなN」質問はNを入れ替えればどんなトピックでも使える。実際、本研究のデータを見ると、あらゆるトピックにこの「どんなN」質問がされていた。そこで、トピック毎に、「どんなN」を使った会話の練習を取り入れ、「どんなN」質問に対するいろいろな答えを考えさせる時間を設けることができれば、説明力を養うよい練習の機会が持てるのではないだろうか。また、この機会に、そのトピックで習った学習項目を使ってみる練習もできる。課を追うごとに表現が増え、「どんなN」に関して広がりを持って表現できるようになるはずなので、ここでは、習ったばかりの新しい表現をNについて説明する練習をしていければと思う。こうして、このような練習をトピックごとに続ければ「どんなN」質問に上手く答えられるようになるばかりでなく、あるものの特徴をとらえて相手にわかるように説明する力も養えるのではないかと考えられる。

#### 4.2. タイプ4「どんなこと」の問題点

会話データを見る限り、「どんなこと」を使った質問で求められる答えは、「すること」「したこと」「したいこと」「話したこと」の内容説明である。そのため、「どんなこと」の質問には内容の説明が求められていることを学生は理解していなければならない。今回の会話データでは、ゼロスタート学生と既習学生では答え方に違いがあり、さらに既習学生の

答え方には2つの問題があげられた。

①ゼロスタート学生の問題

「どんなこと」の質問の回答例そのものは少なく2例だけであるが(表2参照)、ゼロスタートの学生は既習学生と比べ質問が理解できていないのではないかとと思われるという点で大きく違いがある。

例 17) 「(友だちはアルバイトとして) どんなことをしているんですか。」

「……」

「(友だちに) 聞きました？」

「あー、あーん、そうじ、そうじしています。」

例 17 は最初の質問では、学生は答えず沈黙している。質問の意図が理解できていないか、答えをどうするか逡巡しているかであることがうかがえる。質問者が表現を変えて、もう一度質問を繰り返すことで答えを引き出せた。

例 18) 「最近うれしいと思ったことは何ですか。どんなことがうれしかった？」

「……うれしいこと？」

「うん。」

「私は好きなことがうれしいです。」

例 18 の最初の質問に対し、学生は聞き返しをすることにより、「うれしいことについて」こたえればいいのかと質問者の意図を確認している。そのうえで2番目の答えで、「好きなことがうれしい」と答えている。また、この2番目の答えには表現に問題があるが、「好きなことをしている時がうれしいです」と取れば答えとして成立している。しかし、最初の質問では質問の意図(何を答えるべきか)が理解できていないのではないかと推測できる。

まとめると、例が2例しかないので断定はできないが、ゼロスタートの学生の場合は「どんなこと」の質問の意味の理解が難しく答えられないのではないかとと思われる。

②既習学生の問題 1

これに対し、初級既習者レベルの学生は「すること」「したこと」「したいこと」「話したこと」の内容説明をしている。(18 例中 16 例、表 2 参照)

例 19)

「ハンチョウは大学を見ただけですか。ほかにどんなことをしましたか。」

「見ませんでした。えー、時間が短い、朝、ハンチョウへ行きます。夜ジャアシンへ帰ります。」

例 20)

「夜、アパートに帰って、友だちとどんなことするんですか。」

「夜の時、友だちと一緒に、ばん、晩御飯作って、一緒に食べて、あとで、あー、自分の部屋で勉強しています。」

例 21)

「へえー、どんなこと話すんですか。」

「うーん、私たちのフロアに韓国語を勉強している日本人がたくさんいますから、韓国語をよく教えるとか、韓国語のTVプログラムについて話しますとか、はい、いろいろな」

答え方は学生の表現力により、短い単文で(例 19)、接続助詞の「て」を使った簡単な複文で(例 20)、かなり複雑な複文で(例 21)といろいろあるが、いずれも何を答えるべきかを理解している。既習学生の場合は、「どんなこと」の質問の意図はほぼ理解できていると考えていだろう。しかし、問題は学生によって表現力に差があることである。表現力の弱い学生への手当をどうするかが問題となってくる。

### ③既習学生の問題 2

表 2 でも示したように 2 例あったが、既習学生の場合のもう一つの問題は、「どんなこと」の質問に常にうまく答えられるわけではないことである。ここでいう「うまく答えられる」かどうかというのは②で述べた表現力があるかないかの問題ではない。次の例を見てもらいたい。

例 22) (アルバイト先で日本語を話すかと質問した後)

「その人〈アルバイト仲間〉とどんなことを話すんですか。」

「わからないとき、日本人に聞きます。」

例 22 は、質問の意図からすると、「何を話すか、話すこと」の説明をしなければならないが、学生の答えは「その人〈アルバイト仲間〉といつ話すか」に対する答えのようである。学生の答えが「日本語の中で分からないことばについて聞きます。」になっていると質問との整合性があり、質問の意味を理解しているといえるであろう。

学生が上の例のように答えた理由には次の 2 つの可能性が考えられる。ひとつは、「どんなこと」そのものの意味がわからないからだという可能性である。しかし、例 22 の学生の場合は、別の「どんなこと」質問には合致した答えがされていたので、質問の意味がわからないという可能性は小さい。もう一つは、「どんなこと」は「どんな」を含む質問文の中でも文脈なしでは出てきにくい質問であるので、文脈がつかめてないから答えられないという可能性である。例 22 の場合、学生は説明として何が求められているかを会話の流れからつかみ取れていないため、答えが会話の文脈から外れてしまったのではないかと考えられる。

以上をまとめると、今回の資料を見る限り、「どんなこと」の質問に関する学生の答え方の問題点は次の通りである。①ゼロスタート学生は「こと」について学習していないため、質問の意味が想像できない。②一方、既習者は質問の意味を理解していても学生によって表現力に差がある。③同じ既習者でも、会話の流れをつかんでいないことにより、質問の意味との整合性がない答えをする学生もいる。

以上の結果から、「どんなこと」の質問にスムーズに答えられるようになるためには、二つのポイントがあると筆者らは考える。会話の流れをつかんでいることと説明にふさわしい表現力を身につけることである。今後の授業での練習でもこの二つに留意しなければならない。会話の流れをつかめるようになるには、教師は学生が尋問のような一問一答に対応できるだけではよしとせず、そこからさらに一歩進んで、ひとつの話題から引き出される様々な質問に答えていく練習を与える必要がある。また、表現力を広げるためには、教師の質問にただ答えられたら終わりという学生の態度から、より良い答えを求めて答え方のバリエーションを考えていく態度へ導いていくことが必要であろう。

### 5. まとめと今後の課題

以上、本稿では、学生との会話データから教師による「どんな」を含む質問を①初級の教科書の練習や練習プリントで取り上げられた質問文 (T1)、②教科書などの練習はないがNが具体的な質問文 (T2)、③Nが抽象的な言葉による質問文 (T3)、④Nが形式名詞の質問文 (T4)、⑤「どんなの」質問文 (T5) の 5 つのタイプに分類し、それに対する学生の答えについて検討した。その結果、二つの特徴があることがわかり、この 2 点に焦点を当てて本校の学生の「どんなN」の答え方の問題点を考察していった。

一つ目は T1 の問題で、ゼロスタートの学生は教科書で初めて学んだ当時の語彙と構文による答えしかできておらず、表現が固定化されていることであった。これを改善するにはまず、「どんなN」の質問に対する答えにはさまざまな答え



方があり、初級で習うあらゆる語彙や表現を使えばより豊かに上手に説明できるということに気付かせる必要がある。その上で、トピック毎に「どんなN」を使った会話の練習を取り入れ、「どんなN」質問に対するいろいろな答えを考えさせ、説明力が強化できるような練習の機会を設ける必要がある。

もう一つは T4 の特に「どんなこと」の質問に関する学生の答え方に、①ゼロスタート学生は「こと」について学習していないため質問の意味が想像できない、②既習者は質問の意味を理解していても学生によって表現力の差がある、③会話の流れをつかんでいないことにより、質問の意図との整合性がない答えをするという問題が見られた。「どんなこと」の質問にスムーズに答えられるようになるためには、会話の流れをつかんでいることと説明にふさわしい表現力を身に着ける必要がある。会話の流れをつかめるようになるには、一問一答の練習だけに終わらず、文脈のある会話の中で質問をし、学生が答えていくような練習が必要であろう。また、表現力を養わせるためには、教師の質問にただ正しく答えられたら終わりという態度から、より良い答えを求めて答え方のバリエーションを増やしていく態度へと指導していく必要がある。

今回「どんなN」の質問文を5つのタイプに分けてみたが、今回のデータでは「どんなN」のNの部分が多様すぎるため、学生にとって簡単な質問と難しい質問を判別するのは難しく、この5つのタイプの難易度が明白ではなかった。今後の課題として、この5つのタイプの質問を意図して組み込んだ、同じ質問内容による会話をゼロスタート学生と既習学生に行い、そのデータを基にどのタイプの質問が難しく、どんな問題点があるのかを見ていき、その解決策を考えていきたい。さらに、このデータを基にして、ゼロスタートの学生と既習者の学生との答え方の差を詳しく見ていき、本学ゼロスタートの学生の指導のしかたを再検討する手掛かりにしたい。その上で本研究の結果と併せて、タイプ1とタイプ4の問題の改善策を具体的に検討していきたい。

#### 注

1. 板井芳江・清水昭子「会話テスト練習における2度質問の分析から見えるもの—プロフィシェンシーのためのフィードバック内容を探る—」『立命館言語文化研究』23巻（2011）を参照されたい。
2. 「属性」については、後述したように、『初級を教える人のための日本語ハンドブック』2000 p.4 に現れる用語である。当該書にはこの用語に関する定義は記述されていない。『新明解国語辞典』第5版では、「（ほかの物にはなく）その物に（の同類に共通して）備わっている性質」と記述がある。
3. 前の学期に初級の授業が不合格になったゼロスタートのリピート学生も含む
4. 限定修飾を受けた名詞は、繰り返される場合や文脈から明らかな場合には、「の」で代用することができる。『基礎日本語文法』p.160
5. 本文中の例1から例4までは、練習問題から抽出したものである。例5から例22までは今回の分析資料からの実例である。

#### 引用文献

『新明解国語辞典』第5版 1997  
 庵功雄他(2000)『初級を教える人のための日本語ハンドブック』スリーエーネットワーク  
 益岡隆志、田窪行則(1992)『基礎日本語文法』くろしお出版

#### 参考文献

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版  
 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川学芸出版  
 板井芳江、清水昭子(2011)「会話テスト練習における2度質問の分析から見えるもの—プロフィシェンシーのためのフィードバック内容を探る—」『立命館言語文化研究』23巻

**参考資料**

- 『岩波国語辞典』第7版 岩波書店 2009  
『広辞苑』第6版 岩波書店 2008  
『新版日本語教育事典』初版 大修館書店 2005  
『日本語小事典』初版 小学館 2005  
『大辞泉』第1版 小学館 1995  
『日本語大辞典』第2版 講談社 1995  
『外国人のための基本ご用例辞典』第3版 文化庁 1995  
『日本語5つのとびら 初級編1,2』立命館アジア太平洋大学 凡人社 2009